

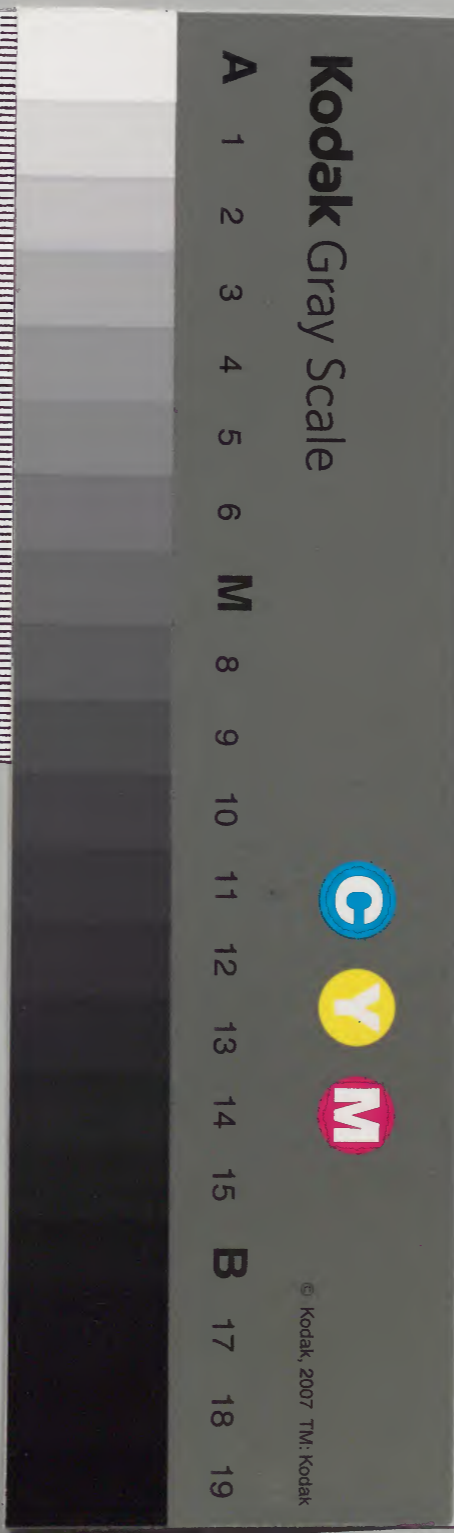
# 羣書類從

三十六

六 七 〇 冊	一 四 函	二 〇 五 號	九 五 九 五 類	和 書 門
------------------	-------------	------------------	-----------------------	-------------

二 四 函	三 〇 五 冊	九 五 九 五 號	和 書 類
-------------	------------------	-----------------------	-------------

内閣文庫	
番號	和 9595
冊數	670 ( 44 )
函號	214 39



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



母いぬるゆくは事いさむるゆいしをいひとぬかとな  
 かりんもいさむるせし事いさむるゆいしをいひとぬかとな  
 誠念し極楽を録ふよめいさむるゆいしをいひとぬかとな  
 事すへていさむる文意さくゆいしをいひとぬかとな  
 記らるゆいしをいひとぬかとな  
 記すゆいしをいひとぬかとな  
 の妻は小ゆいして善悪二の果をさとり和漢の記録  
 をいさむて治乱二の政をいさむしむ極へかといさむ先生  
 の遺失とありしとありしゆいしをいひとぬかとな  
 い事ゆいしをいひとぬかとな

かして乞と記せり

高倉院天皇

安徳天皇

源成院天皇

河成院天皇

佐渡廢帝

尚今

高倉院天皇の妹武八十代ゆいしをいひとぬかとな

母儀建基漢子ゆいしをいひとぬかとな

八歳ゆいしをいひとぬかとな

宇十二年徳政五方端請書仁義乃すしゆいしをいひとぬかとな

高倉院世安民のゆえをいひとぬかとな

経作をいひとぬかとな

是給への異世此不礼帝運のそ然也

安徳天皇ハ高倉に長子に母儀建礼の院徳子 入道大相國平 朝臣法盛息女あり

三業ありて好むとすけ給ひて五位三ヶ年此やと天

下をこやうあつ海庭小入給へり大相國ハ桓武の苗裔

刑部右大臣の男也去保元三年大位に長島悪あり

里ことばめらるる推戻の難をありて天下とみあり

洛中ハあやうやとむ七月九日夜太上天皇崇徳 孝昭太子後 白河関母見

その小城南の難をばいてそら悔り小治東の旧院より

幸給へり是戦場をそらよとめ軍陣を其中おむすよ

同大日小皇と後白河院官兵を流りて西院と征とあむ

やいのしつとあむとてををみり川流矢の

くすおた府命とうしあつり同廿三日太上天皇は瀨波

まへうのしあつ其御堂或ハ刑官小作せられてあし

おは玉地しあつて洛東明法僧士おして不道ハ罪名

を勅しとめく右近衛大納言長以下十三人ハ遠流

し合戦ハあつて散位平長貞以下廿人ハ古詔とあん

くして首とあつりあつ大相國并義朝并法性忠通寺殿の教命

小端して勅切をとりあつて給養とあつりあつを平下り

延尉為義とハ男義朝鼻首せり但依勅也也二条後永曆

元年小治東の舊位給へたる政義朝物長城とあつりあ



伊豆國の流人並に多勢依原朝臣頼朝の流人の後胤  
 之言次義朝<sup>徳内</sup>乃留也甲斐位濃妻並に源氏あをむく  
 らひて謀叛とたらしむ大庭の二郎平家の名を以て報す  
 其心さし多勢石橋の山よせあめりよよ依る本<sup>後</sup>伊那  
 頼朝下命とせし由をその時あひて依りてきて其  
 の次郎一人をうけて船<sup>ツリ</sup>艦小なりて安房島とて  
 且つ海に沖浦の住人おつ依をむとけおしよよ島心  
 庄司次多福本に居おつ大庭の二郎あふくつりてゆ  
 くたつあひてさむくそつかひて敵小なりとてその  
 ありは庄司二郎等おむ日よとそつり壯士うきみとの

あり船中にして依の流海小あひぬ者の義よりりく  
 明らんと申とあけとて上総権舟よらりて下総國  
 をめりて相模を鎌倉のありよつとあひて其東海伏  
 せり室深氏に師先を代野心をさしけしむよ依の舎  
 中つての冠者八田の四郎次郎<sup>後藤</sup>小山の四郎<sup>今延</sup>射<sup>お</sup>  
 をして下野國能毛の家のあは征戦しむよ其を  
 暴風東南よりおちりくるけの庚塵<sup>後藤</sup>はつてを  
 衆れいらくのあふると紀子人馬<sup>後藤</sup>昭とてうらなる  
 松へよりつよふ子孫の勢よりてお方のまよかり  
 河川をれ海よ天力とほさるる昔周武王殷討と

三十一

五

討す所ありきとてしえて高海軍より支ありぬ  
 つぬ五車二馬一乗人門の如く来てとてあすけく  
 討する所ありきとてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 し海軍の天れ候とて来りたりとてあすけく  
 討す所ありきとてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 あやうかりたりとて天候より来りたりとてあすけく  
 のろく事をとてあすけくしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 今是用とてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 のろく事とてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 少く武所の言書をうしぬとてしえぬ海軍より車馬ありぬ

家以下修治と起して一族の口相内大臣宗盛梅原  
 後大納言頼盛中納言教盛中納言知盛春後頼盛春盛  
 心持清宗之位中納言宗盛之位中納言頼盛之位通盛之  
 位中納言宗盛都慮十人同心連署してかくく山王  
 行修して大庭小和とてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 武天皇の御宇に傳教大師圓宗とてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 られたるなりは法とてしえぬ海軍より車馬ありぬ  
 東國の海軍堂にすひ難をかくして公と妙領し  
 出資を押しきたり當時ら馬の懸踏ふして武代勲切  
 の徳とてしえぬ海軍より車馬ありぬ





と数層の透海小舟とてさへもはらわれ舟はさく  
かき舟とゆくも風層をなすつとく雙葉紅敷の松  
舟の中をさへ入る波眼うきて懐古中郷の海を  
はへ〜

任ふれ一初のはつとせあらし神小浪とて松の枝を

干時後白河はなれ他都はなまらふもよ河一初はと石橋

ふ舟のりの給ひもあ海の道ははなれぬつとて

東都安念をうつせりの教感のあまひ小岩をたきつて

ら〜す小具の將軍に仰られ止の教政よら〜ひとあ

藤前の國言傍のふは宗廟小考をせ〜れぬ神の

威光を海一都都身目とせと海〜

隠岐院後鳥羽天皇のふ念と子清母七種子 極楽寺 系信澄女也安徳

の治とゆふの物あり二月廿日清年曰歳お〜

位也のき給への清字十五年藤徳二をまあ〜

〜文章に疎し〜てら馬小長〜給への國のむ父

公うゆふ文ときさ〜武をまよ〜小帝徳の

とあ〜は〜も〜る事ハ被是王細多とあ〜

ゆ〜す〜小庭をう〜は〜多〜く楚王細徳とこれ〜

〜及〜中〜れ〜う〜て志〜わ〜る志〜あ〜ら〜り〜さ〜を〜れ〜ら〜ん〜と〜う



一 如是き治まうれりし伽藍小施入と重衡の信室  
金剛大佛よあひく之てわらふたふまはるる縁わ  
すして清身に和せ候とらり

乃ありあり烟のまやほらん人のせほく種の家  
文治二年 丙午

三月廿一日 日男を夜り力つれく門司をたやゆと  
入道と頼朝の信室二宗の局天子よとたまうて九を  
の河の夜りい道あり名將ふふた手搦ふらう運國毎  
おぬの美のまよとていひく旧里中端と内府のせ處  
まふいよとまよらうて江川のあふりよらうて首を

系年

いひとわ花乃初花らりしと志賀は浦内次と  
征夷將軍二位家西海の白波をまひけ奥州の緑林  
をまひりて後編のく海波をまへ入洛貴門宰相を  
西の羽林大將軍小任せり祥雲の候式希代の世親  
也信法をかうし王法とつき一族の書を志法あふ人  
の然とあふあふのまねをまのけまをれものをす  
す免あへて教誅をまひまうてまをばなをす

建久三年 壬子

三月十二日 法皇崩 丙午 十六 三年高運君也清賀河

送修言野宿津也山勝地名不敷覽とといわ野宿佛  
 靈社修言はたきしは明中又大業戒をうけし并少く  
 奉教とらうし東大寺の重宝智恵をたて法をといへく金  
 銅の靈像ハ津手下して用賜し給教ハ小とじし  
 善心共ハ同の前よ敷りて朝暮はたえりしと波よ  
 うとてを清ししつと分岐の杖の壽玉祈をと  
 して並ふは善因たのよとてしとてしとて生れとあ  
 胡夕の神ありしとてのされは終に念みされ又瑜伽  
 鈴の響たいたを夜とてとてり一葉晴備のきとてと  
 曉くをりのとい書とてとてり一葉と為とてと

草木慈あつたあつといふ也霸陵の松はつくと也  
 鳥雀哀じあふりといふ也洞庭の鶴ふれつてをを  
 けやあふの橋も不深しなるともあへて舟月をま  
 川小咲うけ者り多しあつといふ也慈恵の惠一天の下  
 をとらとて手書仁曰海のが小あつと也

風吹ぬ清世少とれうとていふ入り月のまはれとて

同九年 戊午

正月十三日お軍前右左衛門長子たぬの侍頼家御虎  
 牙職とほとて後座をいへし百段至仲の藤より長  
 して武蔵頼家の先よとてり景時とて社士ありと

執権威を振ひて侍者無人の氣河を以て今の判官  
 能久以下數百人の遠征ふりて京師に一族と滅  
 し渡すゆして叔父あのを禪師に教養し固まれば  
 ころりすくわけて人のあひまらうとしむひて癩病  
 をうけく終入の日出家外祖父を以て時政にこれと  
 わうして能久親系有唐以下金吾禪門の嫡子一萬石  
 按持の軍と打て禪門を以て其朝を奉りて將軍の  
 宣旨を申成て禪門と作ふ也出因又

阿波院天皇八徳院中一子清母在子明の院内寄通  
 建久九年戊午二月三日回歲少して信小つと終つり凡

左位中二子のあひて其地安矣とく高時をあや海  
 を原國に海に武に過るるを感徳自らこれ示  
 せりあて万石に授育とすは信ひ又近臣寵女の  
 ともひくしてゆ海の清濁をうけりて其命と終下  
 の事道にあつたはあひ信ひて終おろし其の夢洞の  
 風林冷しく茨山の月影をひくらふ

建仁元年 辛酉

正月廿三日夜二條殿小朝觀乃行幸あり于時越後  
 守平長用等まつ西土少の刺なる者ふり礼入して  
 次小仙洞に雅系とく其美と遊付大へさうり此を

を平以初許ち事ふらして逐電の後調伏して被誅  
戮す

同三年 癸亥

九月七日奥州と信長が軍中但し被殺後西位下天  
皇の皇子と云ふ今戦の中ありて十月十日自下  
乞といふくせあらうに社士三百人討殺す取回す  
七日小堂原に逐電將軍軍期因る信長の娘と稱  
て後遠江守討殺ありてけしめ小伊豆黨を謀殺し  
次由左衛門少将伊豆入道あをうらして大勝の佐藤朝  
雅を將軍とすきうの風をのあひて相控さる討朝

信長を討す 毎大膳出吏廣元初占好守とてり兵界とて  
して七月廿六日由朝將を全討す

建永元年 丙寅

二月七日攝政太政大臣 皇孫頼朝死後第拾年とてりや文様  
人小すも理政氏をたて後海をとりて浮流とて  
り万機由補依しく親疎ありき

花尚肯花田有露宅新日宅廢昔人

金谷乃花の少少以南橋の月夜を袖をうりて  
りて女返あひ抱く女望らあてくあつて人と  
あふまきゆり秋をたれもむあてく年と記して











人たるは改義後と進付を向く事あり也

人たるは改義後と進付を向く事あり也

とありては改義後と進付を向く事あり也

面をてえらひをいふは改義後と進付を向く事あり也

そらひの古縁にありては改義後と進付を向く事あり也

うぬひは改義後と進付を向く事あり也

して改義後と進付を向く事あり也

を改義後と進付を向く事あり也

う改義後と進付を向く事あり也

く改義後と進付を向く事あり也

里田の改義後と進付を向く事あり也

けりては改義後と進付を向く事あり也

いふは改義後と進付を向く事あり也

とせし人改義後と進付を向く事あり也

あつては改義後と進付を向く事あり也

あつては改義後と進付を向く事あり也

あつては改義後と進付を向く事あり也

あつては改義後と進付を向く事あり也

あつては改義後と進付を向く事あり也

あつては改義後と進付を向く事あり也



此の事は... 命は... 八幡大菩薩... 暁じらば... 一目を... 見... 事... 門... 杖... 昔の

此の事... 命は... 八幡大菩薩... 暁じらば... 一目を... 見... 事... 門... 杖... 昔の























善ありよふりり憲家の人のほつえはひてなりて五載  
 まて驕るをたらしめ女をばさせん玄宗の人の心を  
 そつてして一天をたてて蜀のたけしめ女をばさし  
 孫の帝範十二の徳あり知人と梅氏をばさし人とは  
 右平の切一人の累よめ次君ありて臣のそふ喜杖  
 母をばさしひ也梅氏といひて天に神也神のそふ時  
 下をばさしめりて事えさし海りんやのまのそふひ  
 をつみをぬく一美玉をばさしめひてかとせ  
 子とありてつゆ美のぬくよしてひとめとつよ  
 とねされ也され殿の武下八片を梅とて西海の

後をばさし唐の古家一人のそつて万方の海を  
 一夏れ高き擧陶のそつてつよとつよ周の文王の  
 西のつりあといひてつよとつよ天子ある時つよと  
 子と竈してつよとつよとつよとつよとつよとつよと  
 一傷よめとつよとつよとつよとつよとつよとつよと  
 ありつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと  
 ばさつよとつよとつよとつよとつよとつよとつよと  
 明皇の書を治し強地をばさし虞舜の風をそひ奉綱  
 よふ天徳正暦の芳躅とつよとつよとつよとつよと  
 し後氏よふ水早はつよとつよとつよとつよとつよと

三十一

三十一



ことゆやあつひあめた下せし地也つばさふしあはも  
 のくきさしははつらめ事なるもその魯のな  
 しめたさしよはひしつらさそら子のいけあさといか  
 事記さるとさ六十一年よりこれさ好くをさ乃君  
 事しつて政道をよみさるあひおまもやせう  
 事かそは心るし細い小一人ら海さひあり地民  
 事しん事と縁ふさう也



孝書類從卷第三十六

